要はありませぬ。只だ人以上の力を自分に天が與へて呉れたといふ點を喜ばなければなりませぬ。私共が學校時代に、ボートレースで競爭する、勝つて見たとて一圓か二圓のメタル一箇貰ふだけで、メタル其物には價値はないが、自分達の努力の結果が他に優つて居た、即ち夫だけの德を天が自分に與へて呉れたといふ事を、深く大いに感謝して喜ぶべきではありますまいか。

# 十七　人格修養訓

## 人格墮落の實例

人格の立派は風采の立派といふのとは違ひます、風采がいくら立派でもダメです。詐欺師などは却つて風采は立派にしてゐる、風采が立派でも、詐欺師を稱して、人格が高いとはいへない。其所で風采はよし立派なものでなくても、我々の望む所は



人格の高い事であります。人格の高いといふのは、つまり其の人の性質が善良であるといふ事で、性質が惡くてはいくら風采が立派でも何にもならぬ。所謂附け燒刃は剝げ易いもので、鍍金は何時か一度は禿げます、風采で人を瞞着するといふ事は出來ませぬ。どうしても氣質が良くなければならぬ、其人の本質がよくなければならぬ。其所でお互はお互の本質を良くする事に絶えず苦心しなければなりませぬ。一體人の性質といふものは皆一樣でない。丁度お互ひの顏が異つて居ると同じ樣に、其人の性質は皆異つて居る。併しながら修養の致方によつて或る程度まで其性質を變更させる事も出來やうと思ひます。

又天然自然と性質が變つても來る。周圍の人々が惡い爲に、惡感化を受けて其人の人格が惡くなる事もあります。私共の知つて居る者に耶蘇教の信者で、却々熱心な信仰を持つて居つた人があります。夫がどういふ譯か、縣會議員の選擧に打つて出て、幸ひ當選した、其時、私は「君は、縣會に出ても、他の縣會議員の風を眞似

ないで、今君が着て居る様な、木綿着物で通すといふ様な事でやらなければ到底成功しませんぞ、都會に出でゝ驕奢な風を眞似たとて、ソレデ價値が上るものではない、夫よりは田舍に居て、さうして今日の様な信仰を以て何所までも眞面目に働く事が肝腎だ、都會の人の眞似をして了つたのでは、他日必ず失敗しますぞ」と注意しました。初めはそんな様な事でやつて居つたらしかつたが、其内に漸次と惡風に染まつて、藝者買をする、着て居る物も段々とピカ〳〵光つたものを着る。さうして家に居て百姓するといふ事も嫌になつたと見えて、年中、縣會の開期中計りでなく、殆どモウ縣廳の所在地へ行つて、色々と嘴を入れるといふ事をした結果、一時は代議士にまでもなつたが瀆職問題が起つて、好い恥をかいたといふ事です。是等も生れながらの性質はよかつたけれども、所謂周圍が惡かつた爲に惡感化を受けて不人格なものが出來上つて了つたのです。さうして縲絏の辱かしめを受けて其の人は獄中で死んで了つたが、よしんば今日存命して居ても、誠に悲慘な境遇に陷つ



て居つたであらうと思ふ。或は零落して居るよりは、寧ろ死んだ方が其の人の爲に幸福であつたらうと思ひます。

其人は丁度縣會に出る時は、熱心な禁酒會員の一人であつたが、何時か禁酒會員が飲酒會員になつて了つて、到頭さういふやうな最後に終つたのです。夫れですから、性質が善良であるからといふて安心する事は出來ません。絶えず好い空氣に觸れる、好い空氣を吸はうといふ事に注意しなければなりませぬ。其所で好い空氣を吸ふて、身體を立派につくりあげるといふ事は、却々一朝一夕には出來ない、年月を要する、然るに惡空氣を吸つて直ちに惡結果を身體に受けるといふ事は、一朝一夕に出來ます。

## 善感化と惡感化

故に修養といふ事は一刻も油斷が出來ない、是まで修養したから、餘は打捨つて置いても宜いといふのではいけない。時々刻々修養を怠つてはならぬのです。死す

るまで修養の必要があります。さうせぬと、直ちに所謂惡空氣が浸入して來て、折角築きあげた鍛へあげた修養濟みの身體も、以前の杢阿彌になつて了ひます。其所で毎も申しますが、我々の頭には妙なものが存在して居る、卽ち心といふものが頭の中にあります。其心が善い惡いといふ事は能く示して吳れる、其の善惡の道を敎へて吳れるから、善の道を心が敎へてくれた時には直ちに其の善の道に進んで行くといふことにしなければなりませぬ、夫を心が善道を示して居るに拘はらず、惡道の方へ進んで行くといふやうな事ですと、其人の末路は悲慘な境遇に陷いります。

其所で天は我々に自由の意思を與へて居る、右に行かうと、左に行かうと、お前の勝手であるといふて居る。只だ併しながら此方は善道である、此方は惡道である善惡の二つだけは天が時々刻々敎へてくれます、敎へてはくれるが、强て善道をとれといつては吳れない、夫ですから意思が薄弱なものは、敎へられたる善道に就かずして、ツイ邪道に踏み込みます。其の結果は因果應報の理法で、天の敎へた道に



背いて、惡道に踏み迷つたものには、非常な悲慘な境遇をお與へなさる、さういふやうに、チャンと昔から今日に至るまで間違ひはない、間違はないことに極つて居りますから、心が見て、此方が正しい、此方が惡いなと思つた時には、正しいと思つた方に眼を閉つて利害損得を考へずに進んで行くといふのが一番大切な事であります。さうしませんと折角敎へてやつても其の道をとらない、天の敎へに從はないといふやうな事で漸次敎へられる事も少なくなる。常に惡い事を習慣として居るものは、良心が鈍つて惡い事を夫程惡いと思はずに平氣でやつて居る、夫等はつまり天の敎へが少なくなつたといふ事になります。私共が能く人に話をして聞かせるのに、能く聞いてくれるものには、猶熱心に話をしてやるが、馬の耳に念佛と同じやうな譯であると、十の話しも八分で止めて了ふ、終ひには何にもいはんで置くといふやうな事になります。丁度神樣が吾々に善惡を敎へて下さるのを敎へた通りに絕えず此方から進んで行くといふ事であるならば、益々敎へて下さるに違ひない。

然るに教へても其通りにしない、即ち天の示される通り我々が實行して行かないと、終には其の暗示が少なくなる。さういふ事になると、其人間の末路が悲慘であるばかりではありません、遂にはさういふ能力を天が取り去つて了ふ。例へば手を十分に使用すれば手は益々強くなる、然るに使用しないで何時も働らかせないで置くと、手の働きが鈍くなつて了うと同じやうに、天が其の能力を除つて了ふ。

## 高等感情の養成

曾て外國の或新聞に、何か氣に入らぬ事があつたと見えて、或婦人が、物を言はぬ事に決心をして、二十年も三十年も何をいつても口を利かぬ、筆談で用を足して居つた、處が漸次年を老るに從がつて、モウ口を利いてもよからうといふので明日は口を利きますといふ事を前日に發表して置いた、珍らしい事だといふので、皆なで寄つて來て口を利くのを見ようとした、ところで其の婦人は何か言はうとして、口だけはモグ〳〵やりますが、聲が少しも出なかつたといふ事でありました。折角



天が與へてくれた能力を使はぬと、此奴怪しからぬといふので、能力を天が除つて了ふ、ですからして、今生に於て能力をとられて了つたと同じ樣に其の人の來世には或は啞となつて生れるかも知れませぬ。

つまり我々の能力が、十のものを持つて居るとしたならば、さうして十人にすぐれて居るとしたならば、所謂前世に於て其能力を十分使用して居つた廉を以て今生に於て十人以上の能力をつけてくれたものと私は思つて居ります。例へば今生に於ては立派な人間となつて居り、立派な腦髓を持つて居るといふ人は、前世に於て腦髓を働らかしたといふ廉で、今世に立派な頭腦を持せて生れさしてくれたのかとも思ひます。夫れと反對に横着をして、天が與へた腦髓を十分に使用しなかつたり、手足を十分に働らかせなかつたりすると此次には、さういふ能力は、今まで十分つけられて居つたものは、七分、七分のものは五分といふやうに、足が利かなかつたり、手が利かなかつたり、口が利けなかつたり、盲目になつたりして生れる事にな

る。つまり是等の缺陥を持つた人々は前世に於ては恐らくさういふ機關を十分に使用しなかつたといふ天罰であらうと思ひます。夫れですから人には德義心がある、さういふ德義心を十分に發達させまするとと、此の次に於ては高等な人間となる事が出來る、人間は到底神になる事は出來ませぬが稍々神に近い人間になる。又最下等の人間になりまするとと、獸類に近い人間もあります。其所で天の與へました高等の感情、若くは道德心といふやうなものを出來るだけ働らかせぬと、其の能力を天がとつて了ふ、此の次には所謂獸類となつて生れて來るかも知れぬ。

## 獸類と人間の差別

所謂獸類と人間との異ひは、高等の感情、若くは道德心の有無にあると思ふ、人間は萬物の靈長といふが、夫は普通の動物といくらか考への違ふものを持つて居るといふので、即ち德義心がある、動物には德義心があるかないか問題で、寧ろないといふ方が至當でおらうと思ふ。つまり自分の欲するものを飽までも滿たすといふ



のが獸類で、半獸主義といふ語がありますが、人間半分、獸半分の頭を持つて居る、さういふ人は、例へば斯ういふ慾を滿たしたいといふ心が起ると遠慮なく滿たします。夫れでは獸類と毫とも違ひませぬ、又何々を取つて食べたいと思ふ、さうして夫を取つて食べるといふ事は、普通の獸類と毫とも違はない。よしんば顏は人間であつても心は獸類である。

夫等が即ち人面獸心とでもいふ事になるので、畜生と人間との違ひは、要するにいろ〳〵の慾を抑制する力のあるとないとだけであらうと思ひます。ですから例へば金が欲しいと思ふと、人の金でもとつて了ふといふやうな事は、所謂獸類的で、其の心を抑へるだけの力がない、今生に於て獸類と同じやうに、總ての欲望を飽までも滿たした人は、來世には獸類に生れて來るかも知れぬ。何故かといふと、人間と獸類との違ひは只だ夫れを爲ると爲ないとの力を持つて居るか居ないかにあるので、亦其の力の深いと淺いとによつて人間の上中下が出來るのであらふと思ひます。

故に總ての欲望を抑ゆるといふ事の習慣をつくる事が最も肝腎である。夫を放縱にすると、人の物でもとつて終ひたくなる。亦惡い事と知りながら制する事を知らずにやるといふ、さういふものゝ結果は實に悲慘な事になるのです、つまり畜生と同じやふな事になつて了ふのですから、人間としてはどうしても人間たるべき資格を持つて居らなければなりませぬ。其資格は德義心の養成、又は欲望の抑制といふ事になります、夫を恣にするやうな事ですと、今申しました人面獸心といふ事に陷つて行きます。そこで人間らしき資格を備へるには、總ての欲望を節する、又節するといふ事が、確かに心に聞いて見たら良いといふ事になつて參りませう、其の心が命じて節した方が身體の爲めになるといふ事になつたならば必らず節するといふ事に日々工夫して行く事が肝腎であります。



# 食ひはぐれはない（一名三ツ割生活法）

# 食ひはぐれはない

凡て此の世の中は、樂觀的に生活するといふ事が、一番大切のやうに考へられます、然るに兎角悲觀病に捉はれて、動もすると、悲觀して了ふといふ事が普通人間の狀態であります、尤も一ぱい呑んだやうな時は、大層景氣のよい事を申して居りますが、直ぐに悄氣て了ふ事を度々見受けます、どうか如何なる場合に於ても、一切悲觀といふ事をしたくないものと考へます、一體人間生活上に何が一番悲觀に陷り易いかといふ事を段々考へて見ますると、俗に食へなくなつたんでは大變だといふのが、一番悲觀の原因であるかのやうに考へられます、でありまするから、食へなくなる事が、果してあるものかどうか其邊を一つ研究して見る事が必要であらうと思ひます。よく昔から太陽と米の飯は、何所へ行つても附物だといふ事を申

しまするが、それにも不拘、兎角、

## 食へなくなつては大變だ

と云ふ心配が、どんな悧巧な人でも、どんな立派な人でも、時々さういふ考へが起り易いやうであります、いや時々ぢやない、常に念頭を離れぬといふ狀態であるかのやうに考へられますが、果して人は食へなくなるものであるかどうか、餘程是は面白い研究題目であらうと思ひます、併し私の考へるところによりますると、人間は必らず食へるものである、斯う言ふて差支へないと思ひます、夫は何故かと申しますにお互ひは僅かな智惠、若くは僅かな才能によつて食はうとするから食へないので、自然に任して置けば必らず食へるといふ事になるのであります、而して茲に夫を證明する事が出來るのは、此地球が初まつて以來、非常な年數が經つて居りまして、從つて此地球上に生活して居つた人類は、非常な數であります、その多數の人類が皆相當な生活をして一代を終つてゐるのであります、是が何よりの證據である。



## 又お互が生れた時には

確かに裸體で生れてゐる、ばかりでなく別段食ふ物の用意をして生れたんでもありませんが、若し生涯食へるだけのものを用意してお互ひが生れたとするならば、食ふ心配はないかも知れませんが、夫は事實に於て出來ない事であります若し子供の生れる度毎に其の子が一生食へるだけの物を積んで置いたならば、地球上はまるで食物ばかりで歩く事も何も出來なくなつて了ひます、殊にさういふ長い間の食物を用意をして置くやうな事は實際に於て出來ない、ばかりでなく全く其必要はありません、そんな事をせずとも年々新らしい食物を與へて下さるやうに、天の組織が出來て居りまする、その代り又十年も二十年もの食物を用意して積んでは置けないやうになつて居る、即ち腐つて了ふ是はそんな必要はないぞといふ天の啓示であらうと思ひます、ですから、生涯食へるだけの物を積んで置く事は無論出來もせず、必要もない、其代り年々新らしい物を造つて下さるので、夫をとつて食つて、

## 昔から今日に至るまで

皆やつて來て居ります、吾々が生れた時には、今日まで食へる食物を積んでは居なかつたけれども、お互ひはどうか斯うか食ふて來て居ります、又吾々の先祖、多數の人類が、どうか斯うか食つて居たといふ事から考へますると、將來も必らず食ふ物に差支へないものであるといふ事を斷定して間違ひはありませぬ、然るに目の前にチャンと用意をして置かなければ、心配だといふ人があるならば、夫は餘りに杞憂ではなからうかと思ひます、人間の生活に必要の物は、食物ばかりではない、最も必要なのは空氣である、その空氣がなくなつて了つては大變であるに不拘昔から今日まで

## 空氣がなくなつたら大變だ

といふて、心配した人は一人もありません、では何故心配しないかといふと、空氣は何時でも存在して居るといふ事を習慣上無意識に覺えて居るからであらうと思



ひます、又太陽は東から登つて來る、さうして西へ入る、是は人が生れ落ちてから、今日まで少しも間違つた事がない、吾々時代ばかりではない、永久に太陽は東の方からチャンと昇つて來るといふ事を確信して居るから、少しも心配しない、夫と同じやうに、過去數千萬年の經驗から見て、食物も永久に存在し得るといふ事を信じて差支へないのであります、隨つて空氣がなくなつては大變だといふ心配の必要がないのと同じやうに、食ふに困るといふ心配をなさる必要もないと思ひます、但し空氣は自然に口へ入つて來るが、食物は默つて居つたんでは入つて來ない、來ないけれども、取るべき道具をチャンと神樣がつけて居られる、即ち何所かしらに食物が作らへてあるから、汝の眼を以てよく見、さうして手足を以て運んでとつて來いと教えてあります、ですから、

## 此手足さへ充分に使つて行けば

決して食ひはぐれるといふ事はありませぬ、是れは人間ばかりぢやない、切ての動

物でも、食ひはぐるといふ事は、昔から聞いた事がない戸外を御覧なさい、空飛ぶ鳥も多數あるが、腹が空つて落たといふ例もありませぬ、又獸類にしても、腹が空つて、其處に倒れて居るといふやうなのもありません、皆何うか斯うか生活をして居る、其點から見ても矢張人間も生涯食ふべき食物をチャンと用意してゐないでも何うか斯うか一生涯を送る事は、今までの經驗から見て出來ることゝ信じて間違ひはないと思ひます、一體吾人は勝手に生れて來たものではありません、神樣がどういふ御都合かして、吾々を此の世の中に生れさせて下すつたのでありまするから、苟くも吾々を此の世の中に生ぜしめた以上、吾々の一代は、必らず食ふ物をチャンと用意なすつておいでになるといふ事を信じて毫とも間違のない事と思ひます、たとへば吾々は口を持つて居る、此の口の中へは、何物をか入れるやうに、チャンと出來上つて居るべき筈でありますから、口がある以上、此口の中へ入るべき物が、チャンと造らへられてあるといふ事を信じて間違ひはないと思ひます、又吾々には



呼吸する機關がある以上、空氣は確かに存在して居る筈であります、然るに呼吸機關があるのに、空氣がないといふやうな片手落の造り方は神樣は決してなさるものではない、これ神樣の經綸と申しませうか。

**却々巧妙至極で**

我々輩の智識では想像だも及ばないやうに出來て居ります、でありますから、お互ひの智惠によつて生活しやうとか、いふやうな考へを一切やめて、我々を神樣が一切おつくりなすつたのであるから、神樣にお任せ申して了つた方が安心であると思ひます、所謂安心立命の基は結局其邊に落付くのではなからうかと思ひます、其所で此食ひはぐれは如何なる場合にもないものであるといふ事になるが、併し食ひ方に上中下があります、是は努力の仕方、手足の使ひ方などで、違つて來るので、之を澤山に使ふ人は立派な生活が出來ます、又少しばかり使つて居る人は貧しい生活しか出來ないといふ事になります即ち努力の大小に

よりまして、生活に高低が生じて來ます、其所で人間の一番の苦痛は食へなくなるといふ問題でありまするが、

## 假に食へなくなる事はないにしても

昨日より今日の生活程度を下げなければならぬといふやうな事に打付らぬとも限りません、否是は有がちの事で、而も是が中々の苦痛であります、其所でお互ひは現在の生活程度を如何なる場合にも下げずしてやつて行かれるやうに、常に工夫を凝すといふ事が必要であります、ところが人には種々の不幸もあり、災難もある、自分ではそんな事はないと思ひましても、どういふ都合か、たとへば月給取ならば職業に放れるといふ事もありませう、亦商人なら失敗するといふ事もありませう、假にお互ひが、自分に少しも惡い事がなくても、先方の都合で職に放れる事はこりや無いとは限りませぬ、否有勝の事であります、その場合に恐らく泰然自若として、平氣で居るやうな人は、誠に少ない事と私は甚だ遺憾に思ひます、假にです、茲に



普通に勤めて居つた人が、如何なる譯か突然職に放れたとする其人は恐らく青い顔をして、家へ歸るでせう、家へ歸つても默つて火鉢の前に腕でも拱んで、心配顔をして居るのが普通であります、妻君が心配して貴郎どうかなすつたんですかと訊いても、却々言はないで、

## 一人で溜息を吐いてゐる

といふやうな事が隨分あらうと思ひます、段々と聞かれた結果、實は別段自分に惡い事もないけれども、銀行の都合とか、會社の都合で今度能める事になつた、といふやうな話でもして御覽なさい、女は殊に氣が小さいから、非常に心配して、恐らく其晩は寢ないで夜を明すといふのがこりや普通であらうと思ひます、併し能めて直ぐに食ふに困るのではない、多少の積金もある、慰勞金もあるから暫らくはよいが、そんな物は忽ち失なつて了ふ、例へば茲に三千圓金があるとします、三千圓預けて利息を五分として年に百五十圓しか入らない、今まで千圓の生計をして居つた

のが、百五十圓では到底も生計されない、困つたもんだといつて、大騒ぎをやつて夜も碌々眠ずに騒ぐといふのが通常の狀態であります、仍で兎に角是は生活程度をウンと下げなければならぬ、學校にやつて置いた子供も急に退げやう今まで使つてゐた下女も急にやめて了はふ、家賃も今まで二十圓の家に住んで居たが、此んなところに居ては不可ない裏長家へ入らうといふやうな譯で、今までの生活をいろ〳〵と急激に縮少するものが、若し假にあるとしたならば、夫は大きな考へ違ひだといふ事を、私は言はねばならぬと思ひます、さういふやうに慌てゝ

**今までの生活程度を急に下げると**

彼の男は職業に放れたものだから、夫で食へなくなつたと見えて急に裏長家へ引込んだ、彼の男が金でも借に來るかも知れない、來たら居ないといつて留守を使へといふやうな事になる、今まで親しくして居た友人までも遠ざかる、又學校へ行くと罪のない子供までも、お前の家は商賣がなくなつたら、大變小さい所へ引込んだね



といはれる、又取付けの米屋からは彼の人は商賣に放れたから、是からは現金でなければ賣らないといふ事になる、さうなると、四方八方ふさがつて了つて、益々悲觀せざるを得ない事になります、さうして何か得るところがあるかといふと、少しも得るところはありません、では、さういふ場合に、どうしたら可いか、といふのが問題であります、併し從來正直に眞面目に働いて居たとすれば、多少の貯蓄も出來て居りませう、又慰勞金も必らずあるに違ひない、けれどもその慰勞金や、積立金を合併しても、一生其の利息で食つて行ける程澤山にあるのではないから、夫が如何にも心配だといふて所謂悲觀するのであります、ところが先程申しましたやうに一生涯食ふ事の出來るものを茲に準備して置くといふ事が世の中の全體の人に出來ないと同じやうに、大部分は金の利息だけで一生涯遊んで食へるといふやうな事は出來ないやうになつて居る、然るに若し皆なが夫だけの金を持つて居るものとすると、金の價値がなくなります、さうなると銀行で預かつても利息はつけない、

寧ろ保管料を出して貰はなければならぬといふ事になつて了ひます、ですから皆が利息によつて食ふ事は出來ぬやうになつて居るといふて宜しい、又一面から考へますと、

## 人間は働いて食ふべく神樣がこしらへてあるので

一生涯遊んで食へるやうにはしておりませぬ、年々穀物やすべてのものを新らしく作らへて下さるから、夫を取つて食つて行けばよいやうに出來て居ります、夫を一生涯何にもしないで、金の働らきで食つて行くやうな事は、こりや天意に背いた方法だと思つて居ります、さういふやうな人が多くなると、其所で所謂社會主義、共產主義といふやうなものが起つて來て、あれは金の力によつて食つて居るのだからその金をとつて、皆なの頭に分けて終はふといふやうになる、つまり貧富の懸隔が甚しくなると、そんな問題も、必らず出て參ります、でありまするから、貴下方が一生涯遊んで食へる金を持ちたいといふ御希望があるならば、是は却つてお爲に



ならぬからお止しなさい、併しながら全然一文無しでも困る、少なくも三年位食べられる用意は、何人にも必要であらうと思ひます、其所で日本の國民全體が

## 三年の用意をしなければならないとすると

それはどうすればよいかといふに、不動貯金といふ三年貯金によつて金を貯めさへすれば宜いと思ふ、卽ち私共が不動貯金を大いに鼓吹する所以であります、倩々考へまするに少くとも三年位食うて行けるだけの用意金は何人によらず造つて置く事が必要であります、三年の用意さへあれば、現在の生活程度を、如何なる場合に於ても下げなくても可いといふ事を、玆に斷言いたします、夫は一體どういふ方法であるかといふに、其方法を稱けて私は三ッ割生活法といひます、その三ッ割生活法を諸君に御傳授申します、此傳授を受けた人は、將來決して生活程度を下げる必要がなくなるから、心配とか、悲觀とか云ふ事はないといふ事になります、其所で今申上げました一年千圓の生活をして居つた人が、如何なる場合か、職業に放れた

ときに、假に三千圓持つてゐたとします、けれども、今申しましたやうに、三千圓では到底、利息では食つて行けないから、いろ〳〵心配するのが普通の狀態でありますするが、苟しくも三千圓の金があつたならば、決してお騷ぎなさる事はありませぬ、では、其場合どういふ方法をとるかといふと、何でも構はず持つて居る金の三分の一で一年を生活して行くのであります、三千圓の金が茲にあればその三分の一卽ち千圓を一年の生活費にあてる、さうすると從來千圓の生活をして居つた人が、職業に放れても、前の生活を、

**續けて行く事が出來るのですから**

平氣で居られます、何も慌てゝ子供を學校から退げなくてもよい、又小さい家へ引越さなくてもよい、平然として今まで通りの生活を一年間續けて行くといふ事が出來ます、さてそれを見て世間の人は何といふか、彼の人は實に感心だ、彼の人は商賣に放れたから、慌てゝ大騷ぎでもするかと思ふと平氣でやつて居る、あれで見る



と、餘程金があるんだらう、それならば、米も今まで通りやつても取り紛れはないだらうといふので、米屋も持つて來ます、友達も彼奴困るだらうと思つたら、金が餘程あると見えて、平氣で居る、夫ぢや一つ斯ういふ事業を持つて行つて相談して見やうなんといつて、寧ろ遠ざけられる筈であるのに、いろ〳〵事業を持つて來て呉れるといふ事になります、又人を欲しいといふ雇主からは、彼の人は永年彼所で勤めて居つた、夫で慰勞金を貰つて立派に退いた人だから、ァゝいふ堅い人を自分の方で賴まふ、彼の人は千圓とつて居たのだから、自分の方では千二百圓で來て貰はうといふやうな事で、昔より良い仕事が目付つて來るやうな事にもなる、其所が卽ち樂觀する利益であります、効能であります、悲觀して、慌てゝ生活程度を下げたりなんかすると、

**反對に益々世間から冷遇されて**

商賣も目付らないといふ事になりますするが、平氣で今まで通り、職業に放れた後も

生活を續けたといふ事であるならば、反對に良い事が必らず湧いて來ます、ところが一年間は夫でよいが、さてその翌年はどうするかといふと、翌年は殘りが二千圓になつて居ります、其殘つた金の三分の一を又生活に宛ます、さうすると、六百六十圓、利息を入れて彼是七百圓になります、つまり二年目はその七百圓で生活をする、ところが職業に放れて直に生活を落すといふ事はこれは容易に出來ぬことで、又世間體もよくないが、二年目になつて生活程度を三百圓だけ落して、七百圓に下げる事は決して六ケ敷ことではありません、けれども私の考ふるところによりますと少しも下げずにやつて行けるといふ事を、茲に斷言いたします、そりや何故かといふと、今まで永年正直に勤めて慰勞金でも貰ふような人ならば、世間からの信用もあるし、その人の腕も相當あるのですから、一年に三百圓や四百圓は働らけないといふ事はありませぬ、必らず得られますもので隨つて二年目も一年目と同樣、少しも生活程度を下げずに、依然千圓の生活をしてやつて行けます、一體人は生活程



度を下げなければならぬやうにならから、いろ〳〵に心配するが、依然として同じ生活が續けられるならば不安とか心配とかいふやうな事はない筈であります、其所で假に、

**自分が三百圓の働きをする事が出來なくても**

支出の方で、三百圓位縮める事も出來ませう、或は自分の子供達が大きくなつて、夫だけの働きをするかも知れない、さういつたやうな事情で依然相當の生活をして行けるものであります、然らば三年目はどうするかといふと、彼是千五百圓以上殘つて居りますから、三年目も矢張り三分の一、五百圓だけを生活費に使ふことが出來ます、其不足を必ず働いて取ることが出來るのです、大底な品物が半値といへば賣れて了ふ、夫と同じやうに千圓の價値のある人ならば、半分の五百圓で賣るといへば必らず三年目位ゐには身賣りが出來ます、ですから三年目にも千圓の生活が出來る、少しも生活を下げる事はありませぬ、只だ有り金は減つて來ますが、其代り

取つて行くものが段々と殖えて行く、たとへば二年目には三百圓にしかならないが三年目には五百圓になり、五年目には千圓になるといつたやうに、以前千圓とつて居た人ならば元位迄は段々と昇つて參りますから、年が經つに從つて、さういふ風に殖えて來ます、それで生活は下げずにやつて行ける事が出來るのであります、サア、さうなると、何も慌てゝ騒ぎ廻る事はありませぬ、お互ひに一生涯の食物を積んで置くと云ふ事は六ヶ敷いが、三年だけの用意をして置くといふ事ならば、そんなに難かしい事ぢやなからうと思ひます、永年謹直に勤めて居れば、その位の用意は必らず出來ます、夫でありますから、

**萬一職業に放れた事があつても**

決して慌てゝ、要らない苦勞をしたり、馴れない事に手を出すには及びません、何所までも吾人は金の力によつて生活しようとしないで、吾人に與へられたる手脚を働らかして、さうして生活するといふ事を忘れてはならぬのであります、金の用意



といふものは、暫らくの間のつなぎに必要であるにすぎませぬ、あとは働きによつて生活するといふ途を取るより外はありません、元來努力と金と相俟つて、初めて安心の生活を得られるもので只だ努力にのみよつて生活しやうとすると、職業に放れた時に直ぐ困ります、取つたものを、皆使つて終つて何等の用意もないといふのは、よろしくないが、又金だけの力によつて、一生涯遊んで暮らさうといふのは最も惡い話しで、天意に背いた事と思ひます、如何に丈夫な身體でも毎日寢て居て御覽なさい、今度は眞正の病氣になつて起きやうとしても起きられなくなります、即ち天が手脚を吾々に附與してあるにも拘らず、夫を少しも使ひません處から、要らぬものなら能力を除つて終へといつて、除られて終ふのです、でありますから、どうしても日々刻々、身に付いた切ての能力を利用する、活用するといふ事がお互ひに必要であります、日々怠らず、一生懸命に正直に此の手足を働らかして其日々々を愉快に暮らしてさへ居りますれば、即ち食ひはぐれと云ふ事は決してありませぬ。

## ニコ〳〵座右銘

一　今日一日三ツの恩を忘れず不足の思を爲さぬこと

二　今日一日腹を立てぬこと

三　今日一日嘘を云はず無理を爲さぬこと

四　今日一日人の悪を云はず己れの善を云はざること

五　今日一日の存命を喜び稼業を大切に勤むべきこと

右は今日一日の慎にて候



# 大黒様のお蔭

# 大黒様のお蔭

（大正十五年六月賛助員招待會に於て講演）

御挨拶を申上げます、今夕は斯く多數御來會下さいまして、誠に有難とう存じます、猶平素多大の御引立てを蒙りまする事を深く御禮申上げます、お蔭をもちまして、本行も丁度今年を以て創業二十七年になりました、此二十七年間皆様の厚き御引立ての結果によりまして、銀行は日に月に隆盛に赴きまする事は誠に仕合せと存じます、而も此二十七年間を顧みますると、決して穏やかなお天氣の日ばかりではありませんでした、いろ〳〵の日にも打當りましたが、どういふものか、不思議にも此銀行は、いつも災禍を免かれて居ります、遠き昔はさて措きまして、皆様も御承知の、大正九年の財界の恐慌に打當りました當時を考へましても

**誠に不思議に堪えませぬ**

のであります、御承知の大正九年三月十五日には、株式の大暴落がありました其暴落の結果でどういふ影響が財界にあつたかといふと、各銀行の持つて居りました株式、或ひは擔保として貸付けてありました株式さういふやうなものは勿論、數十億圓といふ大きな金額になるのであります、それが大正九年三月十五日以前と、以後との相場の違ひだけを考へましても、やはり數十億圓といふ巨額の差になります、それでありまするから、從つて各銀行でも、知らず〳〵の間に、非常な損害を受けたのは實際でありまして、例ば株式をもつてゐたといたしますれば、其株式が、三月十五日一日だけでも、

**殆ど半値位ゐに下つて了つた**

のでございますから、又貸付けて居つたといたしますると、やはり擔保價格が半分になつて了ひましたのですから、非常な損害を被むつたであらうと思ひます、恐らく全國數千の銀行で、其影響を蒙むらなかつたものは、一つもなかつたであらうと



思ひます、然るに本行はどうであつたでせうか、實に不思議にも其損害を少しも受けては居りません、と申しまするのは、丁度其前年の七月一日でございました、どういふものか、何だか株式を抵當で貸すといふ事を、やめて了ひたくなつたんであります、ソコで全國の七十有餘の支店に向つて、今日以後は、株式擔保の貸付を一切やめて了ふから、

**貸してはいけぬといふ通知**

を出しました、恐らく多數の銀行もありまするが、株式擔保の貸付をやめて了ふといふやうな通知を出したところは他に決してございませんし、又一面からいへばそんな非常識なやり方をした處は他に決して無いのであります、然るに本行では、さういふやうな貸付を一切やめて了つたのは何の爲めであつたでせうか、決して先見の明があつての事ではありませぬ、唯何となくやめたい氣分が起りました故でありました、ソコでやめる事の通知を出しましたのであります、定めし全國の支店長は、

不思議な通知が來たと思つたでせう、銀行として株式擔保の貸金をやめて了ふといふ事は、他に類のない事であるからです、又今まで貸して居つたものも、出來るだけ早く回收するやうにと通知もいたした、それが爲めに翌年の三月十五日までには

**一株も抵當にとつて居らなくなつて**

仕舞つたのでありました、之が、他の銀行とは大分違つて居る點であります、銀行といふ商賣で、株式を抵當に一株も貸してないといふところは、何所を尋ねてもありません、此の點だけは立派に誇り得ることが出來ようと思ひます、若し他の銀行のやうに、やはり株式の抵當貸金を其儘續けて居りましたならば、多大の損害を受けて居つたのは申す迄もありませぬ、それからモウ一つは其當時本行で持つて居りました株式が、其時の相場で計算いたしますると、二千萬圓以上もありました、私は豫て、斯ういふ考へをもつて居つたのであります、一流の大會社、其業態々々の一流の大會社ならば、どんな事であつても、つぶれる事があるまいから、さういふ



**會社の株を十ほど選み**

ました、此銀行の放資物件としてもつて居つたのであります、而も其もつたのは、大正元年以前からでありました、たとへば紡績事業にいたしますれば、紡績界で一番確かといはれて居る鐘ケ淵紡績の株、又、船會社なら郵船會社の株といつたように業態々々で、一番安全確實と思ふ株のみを十程選んでズッと以前からもつて居つたのであります、大正八年の八月でございました、其時計算いたしますると、丁度二千萬圓程の金額に上つて居りました、其株式をどういふものか、

**頻りに皆な賣つて了ひたくなつた**

のであります、併し、大正八年の、七八月頃は、まだ〳〵株式は一番熾んと云ふ程ではなかつたのであります、株式の一番熾んであつたのは、それから越えて大正九年一月二月頃でした、それをどういふものか、不思議にも皆な賣つて了ひたくなつたのであります、ソコデ大正八年八月から、賣る方針をとりまして、賣りに掛けま

したのであります、さういふ次第でございますから、翌年三月十五日の株式暴落の時分には、殆ど大部分を賣り盡して了つたのでありました、若し之を賣らずして、三月十五日になつたとしたならば、實に怖ろしき結果を見たでありませう先程申上げました二千萬圓程の株式は三月十五日後の相場で計算いたしますると、一千萬圓にもなりませぬのであります、夫でありますから三月十五日まで持つて居つたとしたならば、其

**株式だけで一千萬圓以上の損**

をして居つたといふ事になります、その損をのがれて了つて居るといふ事は、實に不思議ではありませんか、それからモウ一つ不思議な事は、やはり大正八年十二月一ぱい限りで、家屋擔保の貸付一切をやめて了つたのであります、皆様は御承知でおいでゝすかどうか知りませんが、東京市中の家屋擔保は、私のところが殆んど專門のように扱つて居つたのであります、永い間やつて居りました、之は、家屋が立



派な價値があるにも不拘、融通の途が何所にもついて居りませんので、それに融通の途をおつけ申し上げるならば、大變皆様の御便利であらうと思ひまして、ズッと前から家屋擔保の貸付をいたして居りました、それをどういふものか大正八年十二月三十一日限りでやめて了つたのであります、それをやめずして大正十二年九月一日の

**大震火災にぶつかつたらどうなつた**

でありませう、夫こそ大變な損害を受けたでせう、御承知の通り東京の大部分は皆焼けて了つたのであります、さういふ譯でありますから其時まで此家屋擔保をやつて居りましたならば、その損害は、又數千萬圓に上つた事であらうと思ひます、それを不思議にも、大正八年十二月限りでやめて了ひましたから、その損害をのがれたのであります、それから又、株式擔保をやめて了つた、持つて居る株式も賣つて了つた、家屋擔保もやめて了つたといふのですから、茲に金が餘つて來たのであり

ます、其餘つた金をどうしたか、之も不思議の一つであります、いつでも入用の時に引出せるやうに、政府の特別の保護のある

**一流の特殊銀行に金を預けて置いた**

事と、モウ一つは公債證書を澤山に買つて持つて居つたといふ事でございます、銀行家として、此の位ゐ馬鹿らしく且つ割の惡い放資方法はないだらうと思ひます、何故かといふと、公債證書は政府の發行したものでありますから、堅いには違ひないが、利息は安いのであります、その利息の安い公債證書を澤山に持つて居るといふ事は、ソロバンの上から申しますると、馬鹿らしい譯でありますするが、何だかしら公債證書を持つて居りたくなつたのでありますから、出來るだけ買つて、

**銀行の金庫の中へ納つて置いたのであります、その寢かして置いた公債證書だけが五千萬圓ほどあつたのであります、ソコで本行が公債證書を澤山持つて居るといふので、只だ君の銀行の金庫に納つて置くといふのはつまらないではないか、自分の方へその公債を預けてはくれまいかといふ事を、度々交渉を受けたのであります、預けてくれゝば一分位ゐの信託手數料を差上げるといふ事であつたのであります、五千萬圓の一分といふと、五十萬圓になります、たゞ其銀行へ預けて置くといふだけで一年五十萬圓の手數料を本行はとれるのであります、それを何だか、**

**さういふ所へ預けて置くのはいやな感じ**

をもつたので、其の儘自分の金庫へ納つて置いたのであります、それがどうでせうか、どれ程の働きをしたかといふ事は後で分つた話で、大正八年九年頃には想像さへも付かなかつたのであります、而も其の公債證書が、どんな役立ちをしたかといふ事を申上げますると、皆樣御承知でございますするが、大正十二年九月一日あの大震火災で一番困つたものは金でありました、多數の罹災者は初めはマアどうかして

居つたからよいやうなものゝ、日が經つに從つて段々寒くはなる、第一着物が必要、食べ物が必要、住ふ家が必要、さういふ譯であつたんであります、けれどもそういふ物を得るには金がなければどうする事も出來ない、其の金を何所の銀行でも拂つてはくれません、之は拂へないのが當然であります、さういふ場合でありますから

**非常に多數のお方が困つて**

了つた、其の困つた實際を見て居つて、私は到底其の儘にして居る譯には行きませんので、丁度九月五日でございましたが、私は大藏大臣を訪ねまして、御覽の通り多數の罹災者は、預金を持つて居ても取る事が出來ないで困つて居ります、からして、本行の預金者には、是非一つ金を拂つてあげたいと思ひます、併し現金が銀行の金庫の中に納つてある譯ではなし、私の所では、いつでも返して貰ふといふ約束の金が現在三千五百萬圓程あります、之を各銀行が返してくれゝば、それをもつて直ちにお拂ひ戻しをする事は出來ますけれども、各銀行が拂つてくれませんから、



そんなものを當にする譯には參りません、つきましては本行の金庫の中に納つて置きました五千萬圓を、あの

**地震に皆な持ち出して私の手許に**

持つて來てあります、之は政府が發行した公債證書でございますから、斯ういふ場合にこそ政府が買あげて貰ひたい、其の金によつて、今度の罹災者に、皆お拂ひをしてあげたいと思ひます、どうぞ政府で買上げて下さいと、大藏大臣に掛合ひました、大藏大臣は、イヤ御尤ともであります、斯ういふ場合にこそ、貴下の銀行で拂つて下さい、併し政府にもいろ〳〵都合がありまして、それを買ひあげるといふ事は出來ませぬが、何とか金の都合をつける事にいたしませう、金の都合さへつけばよろしいのでせうから、どうぞさういふ事に願ひたいといふので、大藏大臣の御心配で、金は其の公債證書を引當に、いくらでも出る事になりました、それでありますから、直ちに

## 貯金者のお方に全部をお拂ひ戻す事が

出來たのであります、夫でモシ此の公債證書を持つて居りませんとしたならば、又持つて居つても之を他に預けて居つたとしたならば、あの時には何の役にも立ちませんのでありました、誠に無計算のやうな、ソロバン珠を知らぬやうなやり方をして、自分の金庫の中に五千萬圓の公債證書を寢かして置いた事が、あの震災の時には非常に役に立ちまして、多勢の貯金者がどの位ゐ喜こんで呉れたか知れませぬ、第一日の如きは數萬の貯金者が門前に群集して、さうして其金をお受取りになつて殆んど只だ貰ひでもしたやうに、非常に喜こばれたのであります、それを見まして私は實に涙を流して喜こんだやうな次第であつたんであります、其當時

## 本行で拂ひ出しました金だけ

でも三千五百萬圓といふ大きな金高でありました、此の金が多くはバラックの建築費になつたんであります、東京のバラックの大半は、本行の拂戻しました金を基礎



として出來たやうなものであります、さういふやうに奇妙に災難を免がれましたのは、大正八年に株式擔保をやめたり、或は家屋擔保をやめたりしたからであります、斯ういふ事になりましたのは、私に先見の明があつてやつたのだらうといふお方があるかも知れませぬが、決してそんなものぢやありませぬ、震災があるといふ事は夢にも思つて居りません、大正九年の三月十五日に株式が大暴落するといふ事も夢にも知りません、只だ何となくさういふ處置をしたくなつたといふ事が

## 實に不思議な事でございます

先見の明でも、私共の手腕の然らしむるところでも何でもありませぬ、それでは何の爲めか、之が皆樣によく御承知置きを願ひたいと思ひます點であります、本行には、本行の守り神がありまする爲めに、此二十七年間無事に大きくなつて參りました、而も何等の傷も受けずに、無病息災で、健全無垢の銀行として、今日あるをいたしました事は、私共の腕でもなければ、先見の結果でもありません、一に本行を

お守り下さる神様のお蔭であります、こんな事を申しますると、迷信家のやうに仰しやるか知れませぬが、私は個人としましても、不思議な事が澤山ございましたが、又銀行としても先程申上げまする通り、

**實に不思議にも能く危難を免かれ**

て居るのであります、ソコで、本行では昔より大黒様を本行の守り神としてお祀り申上げて、銀行の益々盛んになりまするやうに、又從業者は健康にして仕事に從事出來まするやうに、又本行に取引していらせられる貯金者のお方々に、益々幸福をお與へ下さるやうにと、私は一日としてお頼みしない日はないのであります、神様が本行をお守り下さいましたからこそ、不思議にも災難をのがれて今日あるを得たのであります、皆様はお氣がおつきになりますまいが、皆様もひとしく本行の守り神の大黒様の御守護をお受けになつて居るのであります、皆様のお手許に差上げてあります



**通帳を御覽になりまするとと**

其の後のところに、大黒様のお姿が出て居ります、其通帳をお持ちになつておいでなさる限りは、ヤハリ銀行をお守り下さると同じやうに、皆様をお守り下すつて、知らず〳〵の間に、皆様に幸福をお與へ下すつておいでなさるのであります、此頃不思議な手紙が私の手許へ參ります、私は此貯金を初めてからといふものは身體が大變丈夫になりました、又私は貯金を初めてから不思議に夫婦仲がよくなつたといふ事をいふて參ります、又、商賣が繁昌し出しましたといふ事をいふて參ります、

**一體人間の幸福といふものは**

何であるかと申しますると、第一は身體が丈夫であるといふ事、第二に家庭が圓滿であるといふ事、第三に商賣が繁昌するといふ事、之が卽ち人間の望む幸福であります、大黒様は福の神様であります、其の福の神様が人に仕合せをお與へ下さるといふならば先づ第一に身體を丈夫にして下さるに違ひない、第二には家庭を圓滿に

して下さるに違ひない、又第三には商賣を繁昌さして下さるに違ひないのであります、殊に大黒様は、所謂民衆的に親しまれて居る神様であります、此の大黒様は、出雲の大社に祀られて居る神様で、實に二十有餘のお名前がありまして、戰ひの方では軍の神様といはれて居ります、又商賣の方からは商賣の神様といはれて居ります、又醫者の方からいつてもヤハリ醫藥の神様といはれて居るのであります、現に慶應義塾の醫科大學では毎年正月に

**醫者の方の神様として大黒様**

をお祀りして居ります、丁度私が大黒様の掛軸をもつて居るといふので、借りに來られた事もございます、さういふやうな譯で、有ゆる方面の神様として尊敬されて居ります、さういふ譯で、お醫者様の神様でもありますから、大黒様にお縋りさへすれば身體が丈夫になるといふ事もいへやうと思ひます、又出雲の神様でございますから、所謂緣結びの神様でありますから、夫婦仲をよくして下さるのはこりや



當然だらうと思ひます、夫婦仲がよければ家庭は圓滿に違ひありませぬ、又大黒様は商賣の神様でありますから、大黒様が御守護下さる以上、商賣が繁昌するのは當り前であります、そういふ次第で本行にお取引きをなすつておいでのお方に對しましても、銀行をお守り下さると同時に、

**皆様をお守り下すつて居る**

のであります、通帳がお手許にある限り、必らずお守り下さいますから、身體が丈夫になり、家庭が圓滿になり、商賣が繁昌するのは當然の事であると思ひます、さういふ譯でございますから、どうぞ皆様のお知合ひのおうちに、身體の弱いものがあつたら、不動貯金を初めさへすれば身體が必ず丈夫になるといふ事で、お勸めを願ひたいと思ひます、又夫婦仲が惡い御家庭がありましたら、不動貯金を初めろといふてお勸めを願ひます、商賣が繁昌しない家がありましたら、貯金を初めさへすれば商賣は必らず繁昌するからとお勸めを願ひます、さういふ風にして行けば人

は必らず幸福になり得るのであります、それを生半可學問をしたお方には、往々そんな事があるものか迷信だなどゝいふて斥ぞけますが、さういふお方は神様は決してお守り下さりませぬ、論より證據體もお弱いでせう、家庭も圓滿ではありますまい、商賣も具合よく參りますまいと私は信じます、迷信でも何でも

**信じまする以上は必らず効驗**

があるのであります、御利益があるのであります、私共は何事も神様におすがりして、さうして一生を幸福に送りたいと思ひます私ばかりでなく、日本國全體の人を是非幸福の境涯におくらさせたいと常に思つて居ります、我々從業員千五百名は、大黒様のお使ひ奴として、常に幸福の因となる貯金を一生懸命でお勸めして居りまするが、千五百名だけの力では決して行き亘るものぢやございませぬ、茲に於て皆様のお力をかりて、日本國中一人殘らず貯金者として、眞に富强國にしたいと思ひます、さういたしますれば、日本國中の人は、皆な身體が丈夫で、家庭が圓滿、且



つ商賣が繁昌するといふ事になります、さうなれば

**日本國は實に平和にして**

且つ富强の國となるのであります、今日危險思想がどうとか、國家の將來がどうとかいふやうな心配もなくなります、さうするには貯金を普及させるに限ると思ひ、私共は一生懸命で勸めて居るやうな次第であります、段々皆様の御援助を蒙りまして、本行は日に月に盛んになつて居りますが、此の次皆様にお目にかゝる時は恐らく本行は三億圓の預金になつて居るだらうと思ひます世間の景氣がどうあらうと、本行の商賣から申しますると、景氣不景氣を超越して、

**いつも具合よく進歩發展いたし**

て居りまするといふ事は全く神様並に皆様のお蔭と、私は衷心から感謝いたして居ります。どうぞそういふ譯でございますから、猶此の上ともお引立て下さいまして、益々本行の爲めに、御援助をお與へ下さるよう只管お願ひいたします。

## ニコ〳〵暗示

一、ニコ〳〵すれば身體健康

二、ニコ〳〵すれば家庭圓滿

三、ニコ〳〵すれば商賣繁昌



# 大黒様と私との奇縁

今日は大黒祭を執行いたしました事に因みまして、大黒様と私との奇縁奇瑞のお話しを申上げて置きたいと思ひます。日露戰爭が終りました年の十二月三十一日に伊勢へ出かけまして、其翌日、即ち明治三十八年の一月元旦にお詣りをいたしましたのでした。其歸りに、何か土産をと思ひまして、宇治橋の側に、土産物の店がありまするので、其所へ立寄りまして、何か買はうと思つて、いろ〳〵見ましたが少しも見當りませんであつたんです。ところが只だ一つ棚の上にならべてありました二寸位の大きさの木彫の大黒様と、惠比壽様がならんで居りましたのです。夫を見て居りまするとと、如何にもよく出來て居りまするのです。

## 何となくニコ〳〵の氣分

を漂はせるやうに思ひましたから、是を一つ土産にといふので、夫を持つて歸つた譯なのであります。是が抑々ニコ〳〵主義を鼓吹いたします原因であつたので其大黒様のお顏を拜して居りまするとと、いろ〳〵の意味が讀まれますのであります。即

ち大黒様のお顔を拜して居ると、身體が丈夫であるといふ事、又心の平和といふ事も現はれて居りまするし、又非常に金持であるといふ事も分りまするので、總て人の望みまする所謂福分を、あのお顔の中に有つておいでなさるといふやうな事に思ひ付きまして、吾々が世に處する手本といたしましては、大黒様が最も好いやうに考へましたのであります、のみならず昔から大黒様は福の神として、如何なるところに至りましても神様に祀られて居るやうな譯で、少しも敵がない。斯ういふやうな流義で世に處するといふ事が、吾々にとつて最も必要に考へました。

## 爾來所謂大黒主義になつた

のであります。是が抑々大黒様と、私との御縁故がついたのでありまして、以來頻りにニコ〳〵主義を鼓吹いたして居つたのであります。

其後は明治四十三年だと思ひます。名古屋に共進會がありまして、共進會見物に出掛けました、さうして會場の中を歩いて居りまする時に、不圖見當りましたのが



丁度二尺以上の銅像の大黒様であつたのです、其前をズット通りぬけましたが、何だか氣がかりで、又再び戻つて其大黒様をジッと見て又出掛けましたが、又何だか心殘りがしまして、戻りまして、仕舞ひに夫れを買ふ事に決心して値段を聞きましたところが八十圓とかいふのでした。欲しくて堪りませんので、夫を買ふ約束をいたしまして、他に土産を持たずに歸つて參りました。

其大黒様が卽ち銀行に安置されてありまする大黒様であるのです。其御分身が各店々に祀られて居りまするので、爾來本支店に於きましては、いつも元日には大黒祭を執行いたして居ります、夫以來大黒様が當銀行の守護神となられたのであります。其以前は只だニコ〳〵主義を

## 大黒様から思ひつき

まして、常にアヽいふやうな愉快なる顔貌をして居るといふ事が、世に處する上に於て、非常によろしいといふやうな意味合から、ニコ〳〵主義を唱へて居つたので

すが、名古屋の共進會で求めて來た大黒樣を銀行の三階に安置いたしまして以來、即ち行員は毎朝大黒樣の前に禮拜して、夫から業務につくといふやうな譯で、其後ズッと例のニコ〳〵行事といふやうなものも行はれましたのであります。其後に於きまして、大黒樣と猶いろ〳〵不思議な御緣故がございまするのです。丁度子年の明治四十五年正月三日の日でしたが……其時は家族をつれまして私は熱海に行つて居りました。子供が百日咳を煩らつて居りましたので、海岸がよろしいといふので、熱海へ行つて居つた時でありまして、熱海の梅園といふところは、大層梅林がありまするので、彼所は暖かいところですから、元日にモウ梅が澤山咲いて居りますのです、夫を見に行つた事があります、さうして其梅園の中の撫松庵と云ふ茶亭で休んで居つたんですが、丁度床の間のところに、小さな箱が一個置いてあります。お正月の事でもあるし、多分花札でも入つて居るんだらうと思つて、何の氣なしにフト蓋を開けて見ましたところが、



## 小槌が入つて居つた

のでありました、夫をとつて見まするとと、言ふにいはれぬ、何となく、どうも面白味のある小槌でありましたので、段々其主人に話しをして、讓り受けましたのであります。其小槌の箱書に書いてある所を見まするとと、即非禪師が五葉の松に彫刻されましたものであります、非常に面白味のあるものと私は思ひました。是も何等かの因緣があるのだと思つて、持つて歸つたやうな譯で、丁度子供が百日咳で煩らふて居りまするので、咳が出た時に

## 其小槌で撫でゝやると

大層氣持が快くなるといふやうな譯で、其小槌を爾來三德の小槌と私は稱けて居ります。

此槌は寶振り出すのみならで
病を癒やし災禍を除く

斯ういふ何だか分らぬものを作つて、夫書き付けて、其箱の中へ納つて、神棚の所に置いてありまするのが寶を振出す外に、病を治し、又災難を除けるといふ意味で、之を三德の小槌といふて居ります。

其後に横地といふ、或漢學者が頻りに不思議な事をいひますので、一夕自宅へ招びまして、いろ〳〵話しを聞いた事がございます。其人は、如何なる神でも拜まうとすると、いつでも拜む事が出來る。例へば大黑樣でも、弘法樣でも、日蓮樣でも、一つお姿を拜さうと思つて、眼をつぶつて、ジイッとして居りますると、自分の眼の前に現はれておいでになる、それで其お姿を皆筆記して、どういふ神樣のお姿は斯ういふのである。斯ういふ神樣のお姿はどうといふやうに筆記して居りますといふ話しを聞いた事があつたんです、又た其の人のいふには、人は皆な

### 夫々の神樣の分靈を

もつて居る、夫が所謂守護神であるといふ事をいひますから、夫ぢや一つ見て貰ひ



たい。私は一體どういふ神樣が御守護して下さるのか、どういふ神樣の分靈であるか、見て貰ひたいといふたところが、其人は頻りに考へて居りましたが、貴下のは大國主大神の魂を受けて居られるといふやうに仰しやつた。そりやどうも大變結構な事であるが、一つ其大國主の神樣のお姿を拜して見たいものだ。それや見る事が出來ませう、といふて、斯ういふ歌を度々神前でおよみになつたらよからうといふて、歌を書いてくれました。爾來、何とか一つ先生のいふのも嘘ぢやなからう、嘘なんかいふ人でもないし、却々漢學に凝り固まつた人で、迷信なんぞといふやうな人ぢやなかつたんです。其人は石龍子のやつて居ります性相學會といふ會がある、其會で懇意になつたんですが、人相なんぞの事で石龍子に喰つてかゝるほど頑固な人であつたんですが、いつの間にか不思議なさういふやうな

### 神を拜するやうな事

になつて來て、又不思議な事をいふのです。自宅へ來ました時に、女中の顏を見て

阿母さんがございませんなといつたが、チャンと其通り此の女中には阿母さんがないんです。變つた事をチョク〳〵いふんです、又嘘なんかいふ人でないといふやうに思つて居りますから、成程神様のお姿も、確に見られるのではあるまいかといふやうに私は考へて居りました。夫ならば一つ大黒様は銀行にもアヽやつてお祀り申してある位だから、殊に靈魂不滅といふ上から考へても、大國主の大神の魂は、今に無論存在されて居るに違ひないんですからして、其お姿を拜して見たいといふ事を年中考へて居りました。夫ですから夜寢る時でも、眠り就くまで、さういふやうな事ばかり考へて、無念無想の狀態に入つたならば、拜し得やしないかといふやうな考へで、度々試みて居りましたのでした。ところが或夜十二時頃、不思議な事がありましたのです。眠つて居りますると、マア

**其所がその靈夢といふか**

何といふか分りませんが、自分では眠つたやうな氣はしませんのです、不圖自分の



前に、一つのお顔が見えまして、何だか私に向つて、ガミ〳〵仰しやる。其ガミガミ仰しやる事がサッパリ聞きとれないのです、只だ其のお言葉の中に二十分といふ言葉がチャンとハッキリ聞えましたのです。其所で私は心の中で、何誰様ですかとお尋ねした、さうすると、我は社稷の神也といふお聲がアリ〳〵と聞えた、訝しな事だと思つて居る内に、不圖氣が付くと、見えなくなつて了つた。

その翌日横地といふ人に會つて、昨夜は斯う〳〵いふ夢だか何だか知れませんがお顔を拜しましたが不思議な事ですといふと、イヤそれは確かにさういふお顔である。大國主の大神のお姿である。そりや確かに貴下は大國主の大神のお顔を拜した譯なんだから、早速一遍出雲へ參詣なすつたら可いでせう。斯ういふ事であつたんです、どうせ出雲へは一遍參拜したいと思つて居りましたから、夫から早速出雲へ出かけまして、マアお詣りをして來た。斯ういふ譯であつたんです。併し夫は迷信であるか、或は一つの幻覺であつたのか、こりや見方によつてはどうでもなりませ

うけれども、兎に角私は不思議に思ひまするのは、

## 社稷の神也といふ

お言葉なんです。社稷の神といふのは變なお言葉だ、どんな書物を見たつて社稷の神といふのはない。社稷といふのは卽ち國家、大國主の神は、國家經營の神で、社稷の神といふのは、こりや不思議なお言葉だと思ひました。私も前以て社稷の神といふ事を、何にかで見た事もなし、思つた事もないのですから、夫れを偶然に、我は社稷の神也といふアリ〳〵とした御返事を承はつたのですから、聊か不思議に思ひましたのです。さういふやうな譯で、大黑樣を横地さんがいふやうに、自分は幾分か分魂を受けて居るのかといふやうな感じもありましたし、しますので、爾來何事があつても大黑樣を念ずるといふやうな事であつたんです。其後私は今日までに、一生の間に、一番災難を受けたと思つた事は、東亞火災保險相互會社といふものに、ッと引張り込まれまして、其所の會社の株券を持ち、相談役とかいふ名前を



稱けられた事が、今日まで私一生の失敗、一生の災難。

## 又一代の危機に

打付かつたやうに考へましたのであります。東亞火災相互保險會社といふのですな生命保險には相互會社はありますが、火災保險には、是れが抑々嚆矢で、面白かつたのです。然るに創立當時思ふやうに金が出來ませんで、重役達が代つて拂込みをしたとかなんとかいふので、どうか一つ持つて貰ひたい、又一臂の力を貸してくれといふので、再々頼まれましたので、幾度か斷りましたが、頻りに言はれまするので、其株を引受けました事があつたんです。さうして此方から前の取締役の家壽田君を其所の監査役として内容を調査させましたのです、ところが驚ろいたのは、あの位ゐ又瞞着しな會社も容易にないのでありまして、拂込になつて、各銀行に預けてあるといふ何十萬の金は

## 實際は帳簿だけで

預けて置いて片ッ方から借りて出して、つまり結局何にもないといふ事になつて居るんです。夫を發覺いたしまして、實に驚ろきましたのです。其内に神田の大火事で保險金を拂はなければならない、然るに金は無し、保險をつけて居る人は、段々重役を探ると、私が關係をもつて居るから、私が何とかするであらうといふので、吾々も多少でも關係がある以上、何とか其邊も處置をしなければならぬといふ事になり、猶進んで其會社を成立させるには、餘程金を支出しなければならぬといふやうな譯で進むにも、退くにも猶金を出さなければならぬといふやうな、丁度泥田へ入り込んだやうな境遇に陷つて了つたんです、どうして之をのがれる事が出來るか、殆ど所謂普通の考へでは難かしいのであります。

其時どうか是は一つ大黒樣にお願ひして所謂此災難を除かなければならぬといふやうに考へまして、一日自分の部屋に端座瞑目いたしまして、頻りに夫を念じて居つた譯なんです、といふのは、其翌日先方の重役と會見して、猶一歩進んで、此方



が助けてやるか、是で緣を切るか、何とかしなければならぬといふやな羽目になつて居つたんですから、明日どういふ事に返事したらよからうか、といふやうな事で、頻りに考へて居つたんです。さういたしますると、暫らくすると眼の前に丁度……それが何ですね、何だか自分が野原見たやうなところへ出たやうな狀態になつて、向ふの方の雲の上に、

**大黒樣が儼然として現はれ**

たところを見たのです、其所で其前にヒレ伏して、どうかお助けを願ひまするといふ事をお願ひした譯だつたんです。そうしてヒレ伏してお願ひいたして居りまするとと、何となく自分の身體に力强く感じたんです。所謂一種の靈氣を感じて、聞き屆けたといふやうな意味に、自分に感じられましたのです、さうして不圖氣が付いて見ますると、モウ夫ッきりの話だつた。是は要するに所謂靈夢といふやうなものであつたのかも知れません。白晝自分の部屋に端座して、さうして眼をつぶつて考へ

て居つたが、ヒョイとさういふ狀態になつたのですから、昔からよくある靈夢といふのは、さういふ狀態であるやうに考へて居る。之は要するに大黒樣がお助け下さるといふ事に違ひない、一切心配しない、何とか

**これは解決して下さる**

に違ひないと考へまして、翌日其重役と會見しました。さうして猶段々追及いたしますると、まだ〳〵知らんやうな不正事件が續々出て來ましたから、是はモウ進んで金なんか出すべきものぢやない、一切是以上の金を出すといふ事は止めて了ふ、といふ事の決心になりまして、從來出した物を取返すといふ一方に心をきめました。又必らず是は取返し得られるものであるといふやうに思ひましたのであります。夫でありまするから、夫以來何等の心配もしませんで、成行きに任してあつたんです。幸ひにして、農商務省の方へ段々と交渉いたしまして、自分が株を持つたのは、欺むかれたのである、斯ういふ話しで持つたのであるといふやうな事を段々了解を得



まして、結局其株券も元通りに直すといふやうな主務省の承認を經て、到頭株券を返して了つた、ですから其點に於ては何等の損害も受けませんでした、ところが德義上何とかしなければ神田の罹災者に對して誠にお氣の毒に思ひまするから、其罹災者の保險金は全部私が拂つて了つたのです、夫で綺麗サッパリに其會社と緣を切つて了つたんです。

さて又此銀行が今日まで丁度二十年間世間からの迫害、誤解も多く受けましたが、其度毎に、一歩々々向上發展して、今日貯蓄銀行といたしましては、第一位に居るばかりぢやございません、銀行の內容といふものも、實に立派なものでありますので、銀行の內容の點に於ても、蓋し澤山の銀行のある中で、私は第一に位しやしないかと思つて、大いに喜んで居るやうな次第でありまするが、斯く

**銀行が立派に成り得た**

といふのは、決して私共の努力とか、先見とかいふやうな爲めでなく、全く天佑、

一面から申しますると、福の神の御加護によつて今日に至つたのであると、私は深く〳〵信じて居るのであります。さてお互ひが此世に生存して居られるといふやうな事も、自分の力で生きて居られるやうに思つて居りますがそんなものぢやないやうに、私は常に思つて居ります。自分勝手に、子供をこしらへやうとしても作らへられるものぢやなし、皆是に神慮であります、世の中に靈力といふか、神様といふか、さういふものゝ存在して居る事は、どうしても

## 疑ふ譯には行きません

のです、いくら科學が進歩しても、此の髯一本でもこしらへられるものぢやありません。此んなものが、こんな所へ生える譯はありませんが、チャンと茲へ出て來る。たとへば爪にいたしましても、指を裂いて見たつて、此んな爪はありませんが、どういふ譯か何にもない所から物が生じて來るやうな事が多々あるのであります。さういふ事を考へまして、世の中に神靈といふものが確かに存在して居るやうに考へて居ります、夫でありまするから、偶然に、たとへば伊勢參宮した時に大黒様を買つたといふのではない、チャンとさういふやうに

## 買うやうになつて居つた

のではなからうかと思ひます。又先程申しました大國主の大神様のお姿を拜したといふのも、是も夢だといふならば夫ッきりでありますするが、或は是はお姿であつたのであらうと考へて居ります、世の中に神靈といふものがある以上、其お姿も拜する事も出來やうし、又其御加護も受けられやうかと考へて居ります。今日大黒祭を行ひまするに付いても、神靈が嚴然として宇宙に存在して居るといふ事を信じるのでなければ、誠に無意味なものになつて了ひます。只だ神様と昔からいふから、叩頭をして置くといふやうなものでは無いやうに思ひます。

其所でモウ一つ不思議な事がある。之は最近の話しであります。今回四國を巡回いたしました時のことでありますするが、或人が私の所へ來て、琴平から高知へ行く

間は、自動車で行くさうですが、此道路は非常に險惡で、一歩間違へば吉野川の深淵へ落こつて了ふのである。餘程危險だ、命懸けでなければ行かれないから、是は何とか俥かなんかでいらつしやるやうにしたらよからうといふやうな、忠告をしてくれた人があります。其所で今までそんな氣はしなかつたんですが、何だか今度の旅行には、例の災難を除けるといふ小槌を持つて行きたいやうに考へまして、今回の四國行には其小槌を鞄の中へ入れて行つたのであります。天沼君などは妙な物を持つて行つたと思つたらうと思ひます。今まで度々旅行をしても、持つて行つた事はございませんが、さういふ意味で持つて行つたんです。其の爲めか何でもなく無事に高知にも行き、又歸りも無事に通つて、少しも危險を感じません、不安にも思はんで歸つて參つたのであります。其所で歸り途に、穴吹の渡船場から其渡船を渡つて、高松へ行くのですが、其渡船場で、向岸の方から船の來る間、待つて居つたんです。御承知の彼所は、吉野川で、清き流れで其の下は砂利石であるんです。其



川のふちで、向岸から船の來る間待つて居つて、不圖、私は何の氣なしに水の中へ手を入れまして、取上げた一個の石があるんです、見ると不思議にも之れが大黒樣のお姿ソックリなんです。而も大きさはこんなもの（指で示す）です。澤山ある石の中から何となく、

**偶然に取上げたのがその石**

なんです、面白いなと思つて手の上へのせると、チャンと立つんです。さうして二俵の俵の上においでになるやうに大黒樣が現はれて居て、お顏もあるし、後ろに袋を持つて、小槌を持つていらつしやる。確かに大黒樣に違ひない。不思議なものが手に入つたと喜こんで持つて歸つて、チャンと安置してありまするが、誰が見ても大黒樣です。大黒樣には餘程御緣故があるやうに思ひまして、此銀行は益々大黒樣の御加護によつて、必らず一層の繁榮を來す事と喜こんで居る次第であります。大黒祭を執行した因で、大黒樣と私との奇緣奇瑞をお話し申上げた譯でございます。

## ニコ〳〵の歌八首

牧野元次郎

正直の頭に神は宿るなり御加護を受けてお家繁昌。

ニコ〳〵と其日々々を暮すには先づ第一に正直にせよ。

腹立つな不平不満は身の毒ぞニコ〳〵暮らせ其日々々を。

ニコ〳〵の人はからだもすこやかで家庭圓滿商賣繁昌。

嘘つきと無理する人の行く先は地獄の外になしと知るべし。

悪口をいはぬ人こそ床しけれ自慢高慢身を破るもと。

忘るゝな其の日々々の存命を深く喜び勵め稼業を。

あら不思議笑ふ門にはよけて行く貧乏神のうしろ姿よ。

——大正十四、一、一日作——



大正十五年十二月七日印刷
大正十五年十二月十四日發行

(定價金壹圓參拾錢)

著者 牧野元次郎

發行者 東京市神田區中猿樂町七番地 江藤邦松

印刷者 東京市神田區中猿樂町七番地 高橋昇

發行所 東京市神田區中猿樂町七番地 弘學館書店
電話四谷五〇七七番
振替東京二二三〇番

弘學館印刷所印刷

趣味と實益・慰安と教訓とを兼ねたる家庭の讀物

不動貯金銀行頭取 牧野元次郎著 修養 ニコ〳〵處世讀本 中判 定價金壹圓三拾錢 上製 送料金拾錢

同 致富要訣 貯金讀本 中判 定價金壹圓貳拾錢 上製 送料金拾錢

佐々木邦著 珍太郎日記 中判 定價金二圓五拾錢 上製 送料金十八錢

同 合卷 いたづら小僧日記 おてんば娘日記 中判 定價金二圓 上製 送料金十二錢

同 七轉び八起き物語 中判 定價金二圓 上製 送料金十二錢

森田みね子著 茶目子の日記 中判 定價金壹圓五十錢 上製 送料金八錢

新刊圖書目錄 無代進呈送料要二錢

東京市神田區中猿樂町七番地 振替東京二三〇番 電話四谷五〇七七番 弘學館書店

終